列島保全への課題

わが国、国土のすがた

⑤積雪寒冷地に暮らす

細雪（ささめゆき）、粉雪（こなゆき）、淡雪（あわゆき）、牡丹雪（ぼたんゆき）、綿雪（わたゆき）、里雪（さとゆき）、名残雪（なごりゆき）、雪月夜（ゆきづきよ）、雪化粧（ゆきげしょう）……。

日本は外国に比べて「雪」にまつわる言葉が多く、英語の「Ｓｎｏｗ」に関連する言葉の数と比較しても、日本の「雪」にまつわる言葉の方が圧倒的に多い。私たち日本人が「雪」と深く関わって生きてきた証であり、「雪」は日本文化にとって欠くことのできない要素である。しかし……。

国土面積の約６割が積雪寒冷地域

冬期の豪雪 国民生活に大きな影響

そもそも日本列島は、地球規模で見ると比較的緯度の低い所にあり、冬の寒さという意味でいえば、わが国より寒い地域は多い。サンクトペテルブルク（ロシア）、モントリオール（カナダ）、ストックホルム（スウェーデン）など、これら諸外国の大都市の冬の気温は、日本の北海道や東北地方の冬の気温と比べて低いが、一方で、札幌や青森のように、豪雪地帯に大都市が存在している国はまずない。

積雪の深さではなく、降雪量を単純に足して、その冬にどのくらい雪が降ったかを示す「年間累加降雪深」が7㍍を超えるところに青森市（人口約30万人）があり、5㍍を超えるところに札幌市（人口約190万人）が存在している。

東京や大阪など太平洋側の地域に暮らしていると実感は乏しいが、日本の国土面積の約60％は積雪寒冷地域にある。

そこには全人口の約20％の人々が暮らしており、北欧4カ国に匹敵するほどの経済規模（国内総生産）があると言われる。この積雪寒冷地の積雪は、いろいろな面で生活に大きな影響を与えている。

雪に埋もれた民家

欠かせない雪への備え

この年末・年始、記録的な大雪が山陰地方を中心に日本海側を襲い、交通麻痺、ライフライン切断、集落の孤立、漁船の転覆、農業被害……など、甚大な被害が発生したことは記憶に新しい。

被害や影響を受けた人の中には、正月を田舎でゆっくりすごそうと、東京はじめ都会から帰省中の人も少なくなかったであろう。

その一方で、太平洋側の東京などでは晴天が続き、駅伝をはじめとする新春イベントが盛大に行われていたのである。

日本海を対馬海流の暖流が北上して流れ、シベリア寒気団からの風が吹いてくるという冬の気象条件を前提とすれば、国土を縦貫する脊梁山脈に沿って吹き上がった湿った空気が、山脈の日本海側で雪を降らすのは当然の摂理である。

この国土の自然条件によって、太平洋側で暮らす人々は穏やかな冬晴れの下で快適に生活でき、逆に日本海側で暮らす人々は、雪と向かい合わせの生活を余儀なくされるのである。

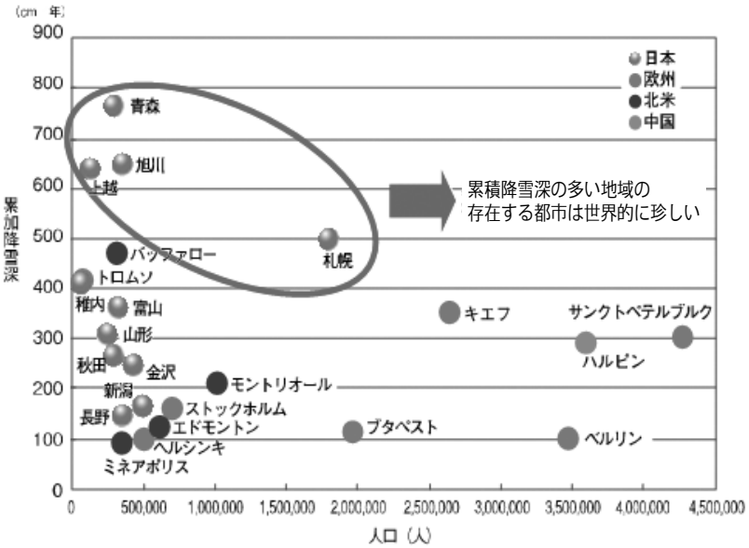
明治維新以降、日本人の多くは積雪寒冷地域を避けて、東京から静岡、愛知、大阪、兵庫、岡山、広島、福岡といった気候温暖な地域を居住地として選択してきた。これらの地域は、年間を通じて雪はほとんど降ることはなく、経済活動も活発で、極めて住みやすい環境にある。

しかし、だからといって、国土面積の6割を占める積雪寒冷地域に積極的に働きかけていかなければ、冬場の活動量が著しく低下し、ひいては日本の経済全体にとっても大きなマイナス要因となり得る。

暖かくなれば消えてしまう雪ではあるが、除雪するための費用は必要だし、雪に備えるための防雪柵やなだれ防止柵、流雪溝・踏面散水装置などのインフラの集積は欠かせない。

グラフ・写真（上左3点）＝出典：国土交通省資料

雪国に多くの人が住む世界でもまれな日本



防雪施設のスノーシェッド

除雪車による除雪作業

ロードヒーティング整備済みの道路